



Title	学問以前
Author(s)	
Citation	一橋研究, 3: 117-122
Issue Date	1957-03-27
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	<a href="http://doi.org/10.15057/6819">http://doi.org/10.15057/6819</a>
Right	

—座談会—

# 学 問 以 前

◇ 出席者

石畑良太郎	山中ゼミ 修一	英国労仿問題の若干の課題
伊東昭雄	増淵ゼミ 修一	初期魯迅研究
岩井昭二	高島ゼミ 修一	アーネスト・バーカー研究
中野雄策	高島ゼミ 修一	再生産構造について
藤森俊輔	高島ゼミ 修一	初期マルクス研究
望月通	上原ゼミ 修一	ルツソー研究
望月雄二	上原ゼミ 修一	ニーチエの文化批判論について
安田良雄	藤井ゼミ 修一	デルタイ研究

編集部、我々が大学院に入つて、大体一年経つたわけだが、これまでに各人夫々に感じて来た、学問に対する態度、或は、問題意識といったことについて話して貰いたい。

H、問題意識といつても随分色々なニュアンがあつて一様に論ずると混乱するのではないかと思うのだが、大体我々の大学生活で意識されていたのは、主として、マルクシズムで言われる意味での問題意識ではなかつたかと思う。つまり、学問と実践、或は学問と社会といったことに関連するものではなかつたかと思う。僕の場合、この様なものに多少疑をもつ様になつたのは、前期を終える頃からだつたと思う。尤も、一時卒論のテーマにラスキなどを取上げようとしたりして、その様な意識はやはりあつたことはあつたのだが、その時は、むしろ彼の思想をささえているものを見てみようという態度の方が前面に出て、それを実践といつたものに結びつけてみる態度は一步退いた、という感じだつた。結局、その様な考え方で、今では、学問の中の一つの専門分野としての思想史をこれから続けて行くために考えておかねばならぬことや、その準備を、ひと先ずヨーロッパのやり方を媒介にしてやつているんだという位の気持なんだが……。

F、僕の場合、例えばレポートの準備などに没頭していると、何だか日常生活と無縁になつて、やつていることに感動することがあるのだが、今まで学問を続けて来たのは、その様な感動を喜びと感じてやつて来た、という様な気

がする。だから、自分の身近な人々のことや、その人達の苦しみなどを考えると、この様な自分の感動のみで、他を犠牲にしているのではないかと感じたりする。自分が強張するよりも、外のことをやる方が周囲の人々の役に立つのではないかと考えたりするのだが……。

E、僕の今までの生活をふりかえってみると、一番幸福だったのは、一生懸命勉強していた時だ。そういう感動をいつも持ちたいと思つて勉強する様になる。だから、君のいう様な感動が最初にあると言える。僕が学問を仕事としてゆこうという時、普通の仕事をしている人の様に、仕事を如何にうまくやるかに、その仕事を根底とした生活にある色々な人間的期待、楽しみを投射していかなければやつていけないものではない。しかし、その様な学問する生活の中の感動が、全くプライベートなものであるとは思えない。やはり我々は個人としても何らかの意味で普通人になろうとするであろうし——その普遍主義を再建するということが問題なのだろうが——、もし君のいう感動がプライベートなものに止つたとしたら、僕等が学問をする意味も楽しみもなくなってしまうのではないか…

F、我々がより進歩し、より幸福になるにはどうすればよいのか、という考え方とか精神が、本当に自分のものとなれば一番いいわけだが、僕にはやはり、学問が生活から離れていると思える。

C、僕は、学問に対する疑惑など余り考えたことがないのだが……。

H、ということは、学問が何らかの意味で社会に働きかけることが出来る、ということ为前提にして、そこに学問の価値を認め、自分が学問する理由を見出す、という事かな……。

C、簡単に言えばそうなのだが……といつても自分のやつた成果によつて直ちに、というのでは勿論ない。しかし、例えば自分の意識とか、論理的思索とかを考えてみても、皆謂わば先人の蓄積してくれたもので養われたものだし、また革命なども理論的意識の具体化だとも言えるし、そういう意味でも学問の価値を信じている。

H、それは確かにそうなのだが、でもやはり、政治の動きなどみても、何だか非常に不合理なもので動かされているといつた感じを強く受けて、人間の思想とか学問とかがその傍でどの様な意味をもっているかなど、つい考えたくなるのだが……。

C、僕にとっては、その様な例えば日本の政治の非合理性こそ、我々の学問の対象になると思う。またその様に学問の成果とか効力を初めから計算してい

たのでは、学問などやれないのではないか。僕の場合は、例えばニュース映画などを観て、生々しい感動或は憤りといつたものを感じずるが、その様なものから学問の手順を踏んで現実アプローチする、その様なアプローチの仕方を育てあげるといふ考えなのだが……。

F、それはそうだが、ニュースを観ていて、いつかその現実に付きかけるといふ事と、今観ているまわりの人々の現実に付きかけることが出来るという事とは、その気持が違うのではないか、何だか結びつかないのではないかと思うのだが。

G、結局、ニュース映画が学問にならなければいけないということだろうが、やはり学問しているだけでは砂川のニュースを見た時に感ずる様な生々しい感動をうけとめることが出来ないのではなからうか。もつと普通の場合でも、本を読んでいては、日常生活の機微に触れることは出来ないと思う。そういう生活の生々しさとか、感情の交流の機微といつたものは非常に大切なものではないか。ニュース映画が学問にならなければいけないとはいうものの、正直なところやはり別ものと感じられる。それならばいつそのこと学問を止めてしまえばよいと言われるかも知れないが、感覚を通じてもなく、一度頭を通してひねって考えてみないと気が済まないという考え方がだんだん身につけてくると、学問そのものを止めるわけにはいかなくなる。又、うつかり日常のデイトイルにまきこまれると本一冊読むことが出来なくなることがよくあるが、いつそ日常のデイトイルの中に入りこんで、これこそ学問だと威張っているか、それとも学問と人生の矛盾に不満と苦しさを絶えず感じながら、その不満と苦しさをいさぎよく受け入れて生きていくか、どちらかなのだろう。

C、その、生活の中の、プライベートな面とか、パブリックな面とかいうことだが…

G、自分にとっては、学問は、プライベートなものに、なっていると、感ずる。……

C、僕は、本質的にパブリックなものと思うのだが……

G、しかし、直接そう感ずるのではなくて、何か頭の中で理論的な操作をしてないパブリックには感じられないのではないかな。僕は自分が今勉強していることが将来にでも誰かの役に立つとか、民衆の為になるとは考えていない。役に立つかも知れない、しかし、反対に非常に反社会的になつて民衆なんか糞くらえということになるかも知れない。とにかく将来役立つだろうという楽観的な予想は今出来ないと思う。そういう意味では学問そのものはパブリ

ツクかも知れないが、僕にとっては、少くとも今は、プライベートにやらざるを得ない。

C、しかしそのように学問を社会に対する一種のサービスというふうにとらなくとも、他の人々と共に問題を解く、という態度が必要ではないのか。解く、ということが、いつかは役に立つことだと思う。ただ単なる心情とかの満足ならプライベートなものに終ると思うが……。

D、問題意識という場合、それを自分の特殊な学問上のテーマとすぐさま結びつけようとするから、ディレンマに陥るのだと思う。問題意識は学問の中だけで生まれはしない。強いて言えば、自分の全生活からにじみ出していく、謂はば“生活の欲求”このようなものが問題意識というに相応しいのではないか。それが“平和”であろうと、“社会主義”であろうと、全生活を捉える様な包括的な大前提であればいい。それが一度設定されたならば、あとは特殊なテーマの中で、それをどの様に徹底させるかが問題になるだけだと思う。そうすればプライベートな生活の欲求が、学問というパブリックな場で生きてくるのではないかと思う。

C、とすると、学問一般が生活と結びついていない、という考えはどこから出てくるのか、このことを考えてみる必要があるが……

F、学問と生活とが全く統一されてると言える人は殆どいないのではないか。

C、しかし、学問と生活とのギャップは、学問を棄てることによつて埋められるだろうか。僕は、学問をやつていくことによつて埋めるより以外にはないと思う。

H、その様なことは、各人のやつている部門によつて感じ方が違ってくる様に思えるが……。

C、いや、むしろそれは逆ではないかと思う。

H、しかし、いくら問題意識、問題意識と言っても、やはり、やつていること自体をおもしろいと思わなければ、やつていけないのではないか。……ウェーバーの、言う様に、或る写本を解釈するのに熱中する、といった様な……。

G、僕にはとりたてて問題意識はない。特に、問題意識という時感じられる政治的な問題意識は、勉強している場合には意識にない。勿論自分が今勉強していることに対しては興味があるし、又それ以上に切実に勉強する必要を認めている。しかしそれは問題意識よりもつと素朴な生活意識というものなのだと思う。

B、ここに居る人達の大分は思想史をやつている材だが、ある思想家を研

究する場合、その研究の仕方は色々あり得ると思う。もつとも、その場合、研究対象である思想家から何物かを吸収することを目的とする限り、——およそ思想史研究とはそういうことを目的とするのではないだろうか？——その思想家の著作にまずぶつかること、そして僕たち自身がそれをどう受けとるか、ということが最も根本的な問題であることは疑いないと思う。ただ、それをやるだけで思想史研究ができるか、という、できる、と答える人もいるだろうし、できないと答える人もいるだろう。僕自身は後者をとらざるをえない。研究対象たる思想家の著作をどう受けとるかが最も基本的な問題であることはたしかに正しいにしても、その著作だけを読みながら、直接に *Einfühlung* をやつて行つたら、当り前の話だが、かにかが自分の甲に似せて穴をほるようなものしかでき上つて来ないだろう。それでは実際には研究対象たる思想家から、ほとんど何も吸収することはできまいし、そのような思想史研究はかえつて害のあることもあるんじゃないかと思う。だから、当然な話だが、思想史研究には色々な補助的操作が必要となつて来るだろう。（実際には補助の方が技術的には主になるかも知れない。）その操作は広い意味でその思想家の周囲を調べることだと思う。その場合、思想は上部構造だから、下部構造を調べなくてはいけない、ということも、もちろん問題にはなるが、それを簡単に適用したんじゃないことになり、色々無理も出て来る。僕がここで周囲と言うのはかなり意味が広いんで、あくまで当の思想家を中心として、その人の経歴から、性格、教養、趣味、人的関係（親子兄弟等から師弟、交友関係等々に至るまで）からさらに、その時代の文化的社会的環境、さらに、それを支える、政治、経済のあり方、と言つた風に、つねに当の思想家の思想と関連させながら、その輪をひろげて行く。（もちろん僕自身の研究はそこまで行つていない、まだほんの始めの段階にすぎないのだが。）そして、その思想を限定された歴史的社会的時点において把握する。そうしたら、その思想（あるいは行為でもよい）がその時点において多くの可能性の中からはなぜえらばれたかが理解されるだろう。その時、さらにもつと大きい思想史の流れの中であるいはより広い歴史の流れの中での、位置づけも必要になるかも知れない。このような操作を続けながら、たえずそれを自分の現実の問題とをぶつつけあつていたら、研究の中から多くのものを吸収出来るんじゃないかと思う学問が役に立つものになるかどうかは、だから当事者がそれをどうやつて行くかによつて、どうでもなるものじゃないかと考えているのだが、皆さんから、自分の学問を役立てるためにはどうした

らよいか、考えを聞かしていただけたらよいのだが。もつとも、「役に立つ」と言つた所で、僕は学問が政治的实践や社会福祉等々にそんなに急に役立つとは思はない。現実をリードして行くなんて到底できることじやあるまい。動いて行く現実を追いついて、そのあと始末するのがせいぜいというところじやあるまいか？僕はむしろ、「学問無用の用」ということを言いたい位だ。もつともこれは僕だけの話だが。もちろん、この「無用の用」のために自分のほかの一切を犠牲にしてよいか、ましてや他人を犠牲にしてよいか、ということになるとまだ僕にもよく解らない。

C、こうやつて色々なことをきくと、結局学問をどの様に考えるかは、各人の体験によつて違つてくる、という気がする。……

H、その様な意味でも、何の苦勞もなく本を読みながら、芸術やその他の趣味をたのしんで来た様な人々、その様な人々を、僕は「書齋族」と呼んでいるのだが……

C、しかし生活条件を云々するのはどういふものかな。立派な勉強をすれば、コンプレックスから抜け出せると思う。現実の中に入りこまず、またそれから離れずやること、そこに学問はあるのではないか。……

A、学問するのでもなく、遊びきるのでもない、そういう生活態度が一番自分をコンプレックスに追いやるものではないかと思う。とにかく、それぞれの信ずる道を歩んで生きたいものだ……

H、ウエーバーの言つた“Fachmann”になる心構え、というのはやはり考えさせる言葉だという感じがする。あの「職業としての学問」も、前期で読んだ時と、卒業の頃になつてから読んだのでは、随分印象の度合が違つた様な気がしたのだが……

編集部、ともかく我々の時期はまだ学問に対して様々な事を考える時で、それだけに色々期待もあると共に悩みもあることゝ思う。今日は、各人の感じを話し合つた程度で、夫々の具体的テーマに結びついた事が論じられなかつたのは一寸残念だが。これからお互にもつと十分話合つてゆきたいものと思う。